熊取町埋蔵文化財調査報告第34集

# 久保城跡発掘調査概要報告書・I

平成１２年３月

熊 取 町 教 育 委 員 会

# はしがき

考古学や埋蔵文化財という言葉がとても親しみやすいものになってきたと思います。毎日のように全国各地の発掘調査が新聞等で報道されるなか、考古学上の定説さえ覆されるような驚くべき発見もありました。

そんな昨今私達の周辺では、住宅開発や道路の整備が着々と進んで景観が大きく様変わりしています。市民生活はとても便利で豊かなものになりましたが、そんな繁栄とひきかえるように貴重な遺跡が次々と失われていることは案外私達の意識に薄いところと思います。

熊取町教育委員会は皆様の御協力と御理解を得ながら毎年50件程の緊急発掘調査を実施しています。

本書は熊取町児童福祉課による東学童保育所建設の事前緊急発掘調査として平成10年度に実施した発掘調査の概要報告書として作成したものです。幸いにも皆様のご援助により東学童保育所は平成11年3月に完成しましたが、東学童保育所の建つ久保で本格的な発掘調査が行われたのは始めてということもあり、今回の調査成果が熊取町の歴史研究に新たな視点を開くことを願っています。

最後になりましたが、本年現地での発掘調査にあたって御協力をいただきました関係者各位に対しましてここで厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

熊取町教育委員会

教育長　甲田　太三郎

# 例　言

1．本書は熊取町児童福祉課による東学童保育所建設工事に伴って、平成10年度に熊取町教育委員会社会教育部文化課（現：生涯学習推進課）文化財係が実施した熊取町久保の久保城跡（遺跡名）における発掘調査概要報告書である。

2．調査は、熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係考古学技師前川　淳、永井　仁を担当者とした。まず平成10年4月30日に確認調査に着手したところ、多数の埋蔵文化財を確認したので、熊取町児童福祉課と協議を重ね、引き続いて本調査を実施することに決定した。本調査は平成10年8月5日から同8月20日までの間現地で発掘調査を実施した。平成11年度中はその成果を整理し概要報告書を作成する内業を行ない、本書の発刊もって終了した。

3．本書における図面の標高は、T．P．（東京湾平均潮位）を用いた。また方位は地図以外については磁北を示すこととした。

4．本書における図面の土色は、『新版標準土色帖』第10版（小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修1990年度版）を用いて目視により比定した。

5．本書の発刊にあたては、富田博之氏（泉佐野市教育委員会考古学技師）、中岡勝氏（泉佐野市教育委員会考古学技師）、内本勝彦氏（堺市教育委員会考古学技師）に有益な御教示を得た。

6．本書の作成及び発掘現場での作業にあたって、下記の調査員・調査補助員の参加を得た。
　石松　直、尾上智史、小野美雪、関井澄子、山本恵子

7．発掘調査現場で作業にあたった作業員と使用した機械類は、株式会社山本組から提供を受けた。

8．本書の執筆は前川淳が行った。

# 目　次

第1章　熊取町の地理的・歴史的環境 …… 1

第1節　地理的環境 …… 1

第2節　歴史的環境 …… 1

第2章　調査に至る経緯 …… 5

第1節　調査地点の地理的環境 …… 5

第2節　久保城について …… 6

第3節　周辺の調査 …… 6

第3章　調査の概要 …… 7

第1節　基本層序 …… 7

第2節　遺構 …… 7

第3節　遺物 …… 11

第4章　まとめ …… 17

# 第１章　地理的・歴史的環境

## 第１節　地理的環境

第１図　熊取町の位置

熊取町は大阪府泉南地域の中央に位置し、貝塚市・泉佐野市の両市に囲まれた町である。町域は東西約4.8km、南北約7.8kmと南北に長い木の葉状を呈している。町域の総面積は約17.19k㎡を有する。地形による面積比を見ると、山地41%、丘陵24%、段丘23%、低地12%に区分され、山地・丘陵部が町域総面積の約３分の２を占めている。

地域別に見ると、町南部においては泉南地域の基本山地となる和泉山地から派生する和泉丘陵とその縁辺部に発達する段丘部が多くを占めている。また北部では狭小ながらも河川の対岸に洪積地が形成されている。

町域に水源を持つ河川は見出川・南山川・佐吉川の３水系が存在している。３河川とも町南部の山間部を水源としており南部から北部へ向かって流下し、泉佐野市を経て大阪湾に注ぎ込んでいる。いずれの河川も下流部が他市域を流れていることに加えて、本町が瀬戸内式気候区の東端に位置しているために年間降雨量が少量であることから、古くから町域一帯に多くの灌漑用の溜め池を目にすることが出来る。

## 第２節　歴史的環境

町内の遺跡は現在41箇所を数える。

縄文時代の明確な遺跡は発見されていないが、東円寺跡の所在する熊取町野田の町立中央小学校で縄文時代早期まで上る有孔尖頭器と石鏃が検出されているので、東円寺跡は現在縄文時代からの複合遺跡としている。

弥生時代の遺跡も発見されていない。JR熊取駅のある大久保における駅前整備事業に伴う平成元年の発掘調査では畿内第Ⅴ様式の形式を示す土器が大量に検出され大久保Ｅ遺跡となったが、その土器は古墳時代初期の所産と考えられている。

古墳時代を示す遺跡について、町中央部の山の手台住宅には五門古墳と五門北古墳の２つの古墳が記されているが、これは開発によって既に消滅している。しかし開発では副葬品や古墳の石材等が発見されたということもなく、これらが古墳であった可能性はほとんどない。

飛鳥時代については、今回の久保城跡98－１区の調査で検出された遺構および遺物が該当すると思われる。

奈良時代については、東円寺跡87－１区の調査で建物４棟と土壙、須恵器、土師器が検出されたのみに止まっていたが、平成11年７月熊取町七山で西暦750年以降の奈良時代を示す多数の須恵器片が宅地開発に伴う事前発掘調査で検出され、熊取町第41番目の遺跡である七山東遺跡となった。

平安時代については、熊取町野田の熊取町役場付近に想定されている東円寺の創建が、発掘調査で発見された軒瓦の比較考察から平安時代とされている。また平成８年度には熊取町大久保から緋屋にかけ

ての私立病院の建設工事の事前調査で黒色土器や須恵器、土師器が自然流路内から検出されている。

鎌倉時代以降中世に関しては、熊取町内の遺跡のほとんどが同時代を中心とした様相を示しているので紙面の都合上詳細にできないが、野田の東門寺跡、久保の久保城跡、大浦の大浦遺跡、紺屋の紺屋遺跡、七山の七山東遺跡では瓦器を豊富に含む包含層が存在しており、建物・溝といった遺構も検出される。

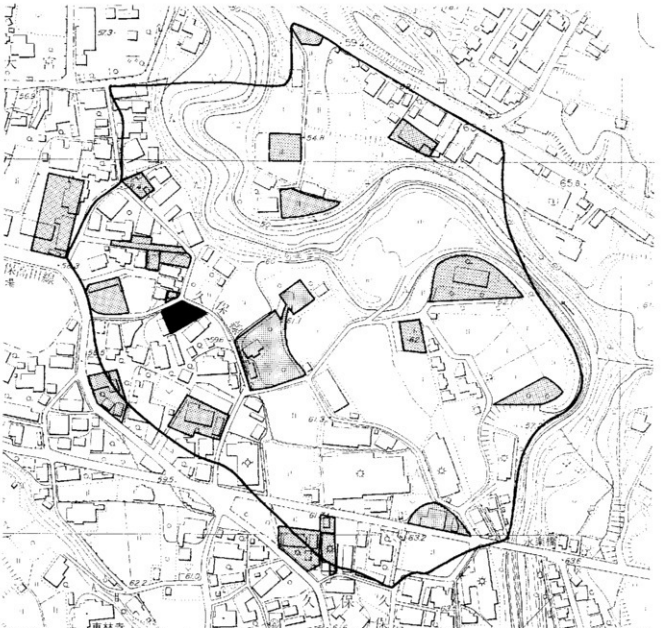
また近世以降の遺跡としては五門の中家住宅、同中家住宅周辺遺跡、大久保の降井家屋敷跡などがあり、同次代に繁栄した大庄屋を物語るような陶磁器片や土師器の大甕、多数の瓦片、埋桶遺構、溝（堀？）などが検出されている。

# 周知の遺跡一覧表

| No. | 周知の遺跡名 | 種類 | 時代 | 地目 | 立地 | 主な成果等 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 降井家書院 | 建造物 | 室町～江戸 | 宅地 | 平地 | 国指定重要文化財 |
| 2 | 中家住宅 | 建造物 | 室町～江戸 | 宅地 | 平地 | 江戸期から明治期頃の陶磁器等出土 |
| 3 | 来迎寺本堂 | 寺院 | 鎌倉 | 宅地 | 丘陵縁 | 15～16世紀の陶磁器や畑作遺構を検出 |
| 4 | 池ノ谷遺跡 | 散布地 | 旧石器 | 水田 | 平地 | |
| 5 | 甲田家住宅 | 建造物 | 江戸 | 宅地 | 平地 | |
| 6 | 東円寺跡 | 寺院跡 | 弥生～江戸 | 宅地 | 平地 | 縄文・奈良・鎌倉～室町・江戸の複合遺跡 |
| 7 | 城ノ下遺跡 | 城郭跡 | 室町 | 宅地 | 丘陵 | |
| 8 | 成合寺遺跡 | 墓地 | 室町 | 畑地 | 丘陵縁 | 14世紀代の600基以上の土壙墓群等検出 |
| 9 | 高蔵寺遺跡 | 城郭跡 | 室町 | 山林 | 山頂 | 土塁・堀切等の構築物を確認している |
| 10 | 雨山城跡 | 城郭跡 | 鎌倉 | 山林 | 山頂 | 月見ノ亭・馬場・千畳敷の地名が残る |
| 11 | 五門遺跡 | 散布地 | 古墳～江戸 | 宅地 | 丘陵 | 須恵器等を採取するも現在消滅 |
| 12 | 五門北古墳 | 古墳 | 古墳 | 宅地 | 丘陵 | 古墳参考地、現在消滅 |
| 13 | 五門古墳 | 古墳 | 古墳 | 宅地 | 丘陵 | 古墳参考地、現在消滅 |
| 14 | 大浦中世墓地 | 墓地 | 室町 | 墓地 | 平地 | 享徳4年銘(1445)の五輪塔の地輪出土 |
| 15 | 久保城跡 | 城郭跡 | 鎌倉 | 水田 | 平地 | 的場・矢の倉等の字名、瓦器片多数出土 |
| 16 | 山ノ下城跡 | 城郭跡 | 鎌倉 | 宅地 | 平地 | |
| 17 | 大谷池遺跡 | 散布地 | 古墳～江戸 | 池 | 平地 | |
| 18 | 祭礼御旅所跡 | 祭礼跡 | 室町 | 山林 | 丘陵 | 五門・紺屋共同墓地 |
| 19 | 正法寺跡 | 寺院跡 | 鎌倉 | 宅地 | 丘陵 | |
| 20 | 小垣内遺跡 | 寺院跡 | 江戸 | 道路 | 丘陵 | 毘沙門堂跡、現在消滅 |
| 21 | 金剛法寺跡 | 寺院跡 | 室町 | 宅地 | 平地 | 大森神社神宮寺、現在消滅 |
| 22 | 鳥羽殿城跡 | 城郭跡 | 室町 | 山林 | 丘陵 | |
| 23 | 築ノ谷遺跡 | 寺院跡 | 室町 | 山林 | 丘陵縁 | |
| 24 | 花成寺跡 | 寺院跡 | 室町 | 山林 | 丘陵 | |
| 25 | 降井家屋敷跡 | 屋敷跡 | 室町～江戸 | 宅地 | 平地 | 敷地を区画する溝や江戸初期の陶磁器等 |
| 26 | 大久保A遺跡 | 散布地 | 江戸 | 宅地 | 平地 | |
| 27 | 下高田遺跡 | 条里跡 | 鎌倉 | 田 | 平地 | |
| 28 | 大久保B遺跡 | 集落跡 | 弥生～江戸 | 宅地 | 平地 | 弥生末～古墳初中心の遺物出土 |
| 29 | 紺屋遺跡 | 散布地 | 古墳～江戸 | 宅地 | 平地 | 奈良～平安期の河川跡検出 |
| 30 | 白地谷遺跡 | 散布地 | 室町～江戸 | 田 | 谷 | |
| 31 | 大久保C遺跡 | 散布地 | 室町～江戸 | 宅地 | 平地 | |
| 32 | 千石堀城跡 | 城郭跡 | 室町 | 山林 | 丘陵 | 天正年間(1573～92)の雑賀衆徒の城跡 |
| 33 | 口無池遺跡 | 散布地 | 平安～江戸 | 宅地 | 平地 | 平安末～鎌倉初の遺構・遺物検出 |
| 34 | 大久保D遺跡 | 散布地 | 鎌倉～江戸 | 宅地 | 平地 | |
| 35 | 大浦遺跡 | 散布地 | 鎌倉～江戸 | 田 | 平地 | 13～14世紀の瓦器等出土 |
| 36 | 久保A遺跡 | 散布地 | 鎌倉～江戸 | 宅地 | 平地 | |
| 37 | 大久保E遺跡 | 集落跡 | 弥生～江戸 | 宅地 | 平地 | 弥生末～古墳初の遺物多数出土 |
| 38 | 久保B遺跡 | 集落跡 | 鎌倉～江戸 | 宅地 | 平地 | 13～14世紀の瓦器等出土 |
| 39 | 中家住宅周辺遺跡 | 集落跡 | 室町～江戸 | 宅地 | 平地 | 江戸期以降の陶磁器等多数出土 |
| 40 | 朝代北遺跡 | 散布地 | 鎌倉～江戸 | 宅地 | 平地 | 鎌倉時代以降の遺物の包含層 |
| 41 | 七山東遺跡 | 散布地 | 古墳～室町 | 田 | 平地 | 奈良時代の須恵器を多量に含む包含層 |

熊取町遺跡分布図

# 第2章　調査に至る経緯



## 第1節　調査地点の地理的環境

現在の見出川は熊取町内を南から北へ流れる比較的深く狭隘な谷状の河川で、周囲の住宅や道路面からは下に数10m低い水面を呈している。

一般的には河岸段丘面上に位置するということになるが、実際に今回の調査地点を掘削すると、河岸に通有にみられる礫や湧水はなく、厚く安定した黄褐色粘質土の地山をみることができるため、河岸段丘を利用した遺跡とは確認し難い状況である。

熊取町では現在の役場のある野田、JR熊取駅のある大久保、そして今回の調査地点のある久保、前述の七山と熊取町内を流れる主要な河川の流域の比較的安定した平地から開発が開始されたのであろう。

## 第2節　久保城跡について

久保城跡は熊取町の中央部よりやや南東部の熊取町久保に所在し、小字には「矢の倉」「的場」などが残っているため、中世の城跡と考えられている遺跡であるが、城主が誰で、どのような縄張りの城がいつ頃築かれたのかはまったく記録にも残っていないばかりか、これまでの発掘調査でも城関連の遺構や遺物は全く見つかっていないので、今では城が本当に所在していたかに疑問が生じている。

近年の発掘調査では、包含層から主に鎌倉時代から室町時代の瓦器の細片を中心とした中世の土器の破片が頻繁に出土するなど、城跡ではなく、中世からの農耕集落的な性格を呈し始めている。

## 第3節　周辺の調査

今回の調査地点の周辺ではこれまで数多くの確認調査が実施されている。しかし中世の包含層は随所に確認できるものの、古代～近世の明確な遺構を確認したことはほとんどなかった。但し調査地点の西側約100m付近には熊取町でも有数の溜池八幡池があり、この極側の調査ではこの池の築堤に関する近世頃の遺構が確認されている。

# 第3章　調査の概要

## 第1節　基本層序

基本的な層序を上から順に記す。

| 主な土層 | 層厚 | GLからの深さ | 備考 |
|---|---|---|---|
| ①客土（造成） | 20cm | −20cmまで | 近年の開発によるもの |
| ②旧工作土 | 7cm | −20〜−27cm | 造成される直前までの農地を示す |
| ③床土 | 6cm | −27〜−33cm | 同上 |
| ④中世包含層（耕作土系） | 10cm | −33〜−40cm | 遺物は未検出 |
| ⑤中世包含層（耕作土系） | 10cm | −40〜−50cm | 同上 |
| ⑥礫層（自然堆積） | 10cm | −50〜−60cm | 溝等の遺構面に堆積している。古代で既に堆積したものであろう |
| ⑦茶色堆積土（自然堆積土） | 10cm | −60〜−70cm | 古代生活面　古代当時の地表か |
| ⑧灰黄色砂質土の地山 | 15cm | −70〜−85cm | 調査検出面 |
| ⑨黄色粘質土の地山 | | 85cm以下 | ⑧とほぼ同性質 |

## 第2節　遺構

遺構としては3本の溝が狭い調査区の中で確認されている。3本は検出した順番に西からSD1、SD2、SD3とした。3本の溝はいずれも開削されたものと考えられる。その各々の開削年代の順番は明確にはできなかったが、出土土器からおそらくSD1が他よりも新しい可能性がある。

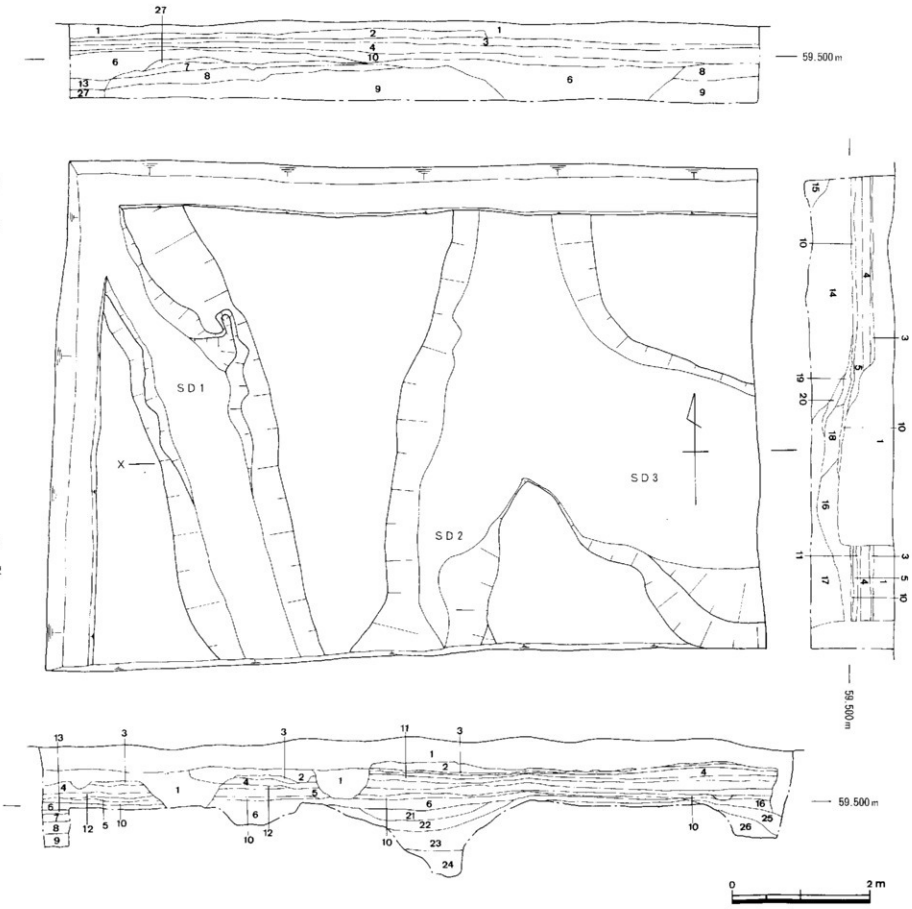
また当初SD2とSD3は別々の溝が互いに切り合っているものと考えられたが、北側調査区壁面では一本の溝の断面しか観察できないことと、それぞれの出土土器の比較から、このSD2とSD3は今回の調査区内で互いに合流する同一の溝と考えるべきものであろう。

また溝の他には特に遺構は検出されなかった。

溝SD1

人力で開削された南北方向を示す溝で、検出時の幅は平均で約2m程度でほぼ均一である。その方向は正確にはN30°Wである。検出長は調査区域内だけの僅か7m程度なので、この溝がそのまま調査区域外までまっすぐな直線状のものか、弧を描く周溝状のものかは確認していないが、検出されたその平面形態は直線的である。

断面の形態を観察すると、一見二段に落ち込んでいるようであり、中央部分が深さ1m程度に垂直に掘り込まれている。溝の両肩部分はなだらかに傾斜して立ち上がって幅約2m程度の溝となっている。深さ1mを測る中央部分の両壁面は完全に垂直に掘り込まれており、鋭利な土木工具でまっすぐに加工された形跡がある。しかし中央部分の両側壁には護岸用の木材などは一切検出されなかったが、護岸施設が全くなかったとは確認できなかった。




調査区平面・壁面・遺構平断面図

## 遺構断面土色

| | | | |
|---|---|---|---|
| ① | 10YR 4／3 | にぶい黄褐色 | 礫 |
| ② | 10YR 4／3 | にぶい黄褐色 | 粗砂 |
| ③ | 2.5Y 7／3 | 浅黄色 | 砂 |
| ④ | 10YR 6／3 | にぶい黄橙色 | 砂 |
| ⑤ | 10YR 6／3 | にぶい黄橙色 | 砂質土 |
| ⑥ | 2.5Y 8／3 | 淡黄色 | 砂質土 |
| ⑦ | 2.5Y 6／3 | にぶい黄色 | 砂質土 |
| ⑧ | 2.5Y 6／3 | にぶい黄色 | 砂質土 |
| ⑨ | 2.5Y 6／2 | 灰黄色 | 砂質土 |
| ⑩ | 10YR 6／2 | 灰黄褐色 | 砂質土 |
| ⑪ | 2.5Y 6／2 | 灰黄色 | 砂質土 |
| ⑫ | 2.5Y 5／1 | 黄灰色 | 粘質土（土器　有） |
| ⑬ | 2.5Y 5／2 | 暗灰黄色 | 砂質土（土器　有） |
| ⑭ | 10YR 6／3 | にぶい黄橙色 | 砂質土（土器　有） |
| ⑮ | 10GY 5／1 | 緑灰色 | 粘砂（青い、土器　有） |
| ⑯ | 2.5Y 4／3 | オリーブ褐色 | 砂質土 |
| ⑰ | 2.5Y 6／2 | 灰黄色 | 砂質土 |
| ⑱ | 2.5Y 7／3 | 浅黄色 | シルト系砂質土 |
| ⑲ | 10YR 6／2 | 灰黄色 | 砂質土 |
| ⑳ | 2.5Y 7／2 | 灰黄色 | 砂質土 |
| ㉑ | 2.5Y 7／4 | 浅黄色 | 粘砂（土器　有） |
| ㉒ | 10YR 6／2 | 灰黄褐色 | 粘砂シルト |
| ㉓ | 2.5Y 6／1 | 灰黄色 | 砂質土 |
| ㉔ | 10YR 8／8 | 黄橙色 | 砂質土（地山） |

## 調査区壁面土色

| | | | |
|---|---|---|---|
| ① | 客土（道成工） | | |
| ② | 5Y 5／1 | 灰色 | 砂質土（旧耕作土） |
| ③ | 10YR 6／6 | 明黄褐色 | 砂質土（床土） |
| ④ | 2.5Y 5／4 | 黄褐色 | 砂質土（中世包含層） |
| ⑤ | 10YR 8／1 | 褐灰色 | 砂質土（灰色中世包含層） |
| ⑥ | 10YR 7／3 | 暗褐色 | 砂質土（黒、埴土、礫まじり） |
| ⑦ | 2.5Y 5／4 | 黄褐色 | シルト系砂質土 |
| ⑧ | 2.5Y 7／3 | 浅黄色 | シルト系砂質土 |
| ⑨ | 2.5Y 7／8 | 黄色 | 粘質土（地山） |
| ⑩ | 10YR 5／6 | 黄褐色 | 砂質土 |
| ⑪ | 10YR 4／2 | 灰黄褐色 | 礫 |
| ⑫ | 2.5Y 8／4 | 淡黄色 | 砂質土（西壁独特の灰色層、黒い斑点入土層） |
| ⑬ | 2.5Y 5／2 | 暗灰黄色 | 砂（やや粗、礫混じり） |
| ⑭ | 2.5Y 5／3 | 黄褐色 | 砂質土 |
| ⑮ | 10YR 4／1 | 褐灰色 | 砂質土 |
| ⑯ | 10YR 2／1 | 黒色 | 砂質土 |
| ⑰ | 10YR 7／8 | 黄橙色 | 砂質土 |
| ⑱ | 10YR 4／1 | 褐灰色 | 砂質土 |
| ⑲ | 10YR 5／2 | 灰黄褐色 | 砂質土 |
| ⑳ | 10YR 7／1 | 灰白色 | 砂質土 |
| ㉑ | 7.5YR 4／3 | 褐色 | 砂質土 |
| ㉒ | 10YR 3／3 | 暗褐色 | 砂質土 |
| ㉓ | 10YR 4／2 | 灰黄褐色 | 砂質土 |
| ㉔ | 10YR 2／3 | 黒褐色 | 砂質土 |
| ㉕ | 10YR 5／2 | 灰黄褐色 | 砂質土 |
| ㉖ | 10YR 4／1 | 褐灰色 | 砂質土 |
| ㉗ | 10YR 4／2 | 灰黄褐色 | 礫 |
| ㉘ | 10YR 5／1 | 褐灰色 | 砂質土 |

調査区平面・壁面・遺構平断面図

埋土は観察する限り、およそ2層に分かれるようである。中央部分の本来の溝の部分には砂礫のみがぎっしりと埋積している。砂礫の中には拳の半分程度の丸い石が大部分であるように観察される。暗渠的な排水施設も考慮すべきかもしれない。

このSD1の砂礫埋土から、SD1の唯一の遺物である須恵器杯1が出土している。この須恵器は約5/3程度の破片であり、検出状況から、呪術的に埋納されたりしたものとは思えず、転落したものと考えられる。

溝SD1は3本の溝の中で人工的に開削された形態を最もよく留めている。しかしその機能については最も謎が多く残された。南北7m余の狭い調査区に南北方向に掘削されているが、その北端での深さは東京湾海水面から約58.9mあり、その4m南側での深さは59.0m、最南端では59.2mであり調査区内で約30cmの比高差が確認できた。またSD1は北側では二段落ち状であるのに対して、南側では逆台形状に緩やかに一段に落ちている。見た目に明らかに南側が浅く、北側が深い。SD2・3ではこのような状況は確認していない。狭い調査区内でこれほどの比高差をもった溝はどのように機能していたのであろう。もし水路とすれば澱みのない水流があったのではないか。或いは埋積を防止するためにこのような比高差の大きな溝を造ったのだろうか。またSD1からは僅かに須恵器坏が1個体だけが出土しただけで多くの土器が出土したSD2・3とは様相が異なることから、SD1は開削半ばで未完成のまま放棄されたのかもしれない。SD1には砂礫がぎっしりと詰まっているところからして、開削から極短期間のうちに洪水などで一気に埋積してしまったもののように見える。

溝SD2

溝SD2は調査区の南東端でSD3と分岐もしくは合流していると考えられる。溝SD2の断面形態およびその埋積は調査区南壁に観察できる。観察によると、その深さは約1.0m程度であったと考えられ、これは先に述べた溝SD1よりもかなり深く、その断面形状に差異が認められる。SD1との関係については、調査区内での切り合いが確認できなかったためはっきりしたことは言えないが、その埋土に含まれた遺物の比較によっておそらく同時に開削されたものではないと推察される。このSD2からの検出遺物は非常に微量であるため、開削年代を遺物から判断するのには熟考を要するとしても、次に挙げる溝SD3で検出されたのとほぼ同様の飛鳥期の遺物を極微量に含み、これと大きくかけ離れた時代の遺物は検出されなかった。

溝SD3

溝SD3は先述したように溝SD2と分岐合流している。平滑に精査した古代の遺構面では確認できなかったが、溝SD2を徐々に遺構掘削していくうちに溝SD2の南東側が拡大していくように出現したもので、溝SD2を掘削するに当たっては慎重なセクションを設定していたにも拘らず、溝SD3を明確に区別するのは困難であった。

## 第3節　遺物

①残存状況から実測可能な遺物はすべて実測図にした。
②実測図と対照できるように写真撮影した。

出土した遺物の数量

| | | |
|---|---|---|
| 総破片点数 | 659点 | |
| 須恵器破片点数 | 11点 | 総破片数に対して1.6% |
| 土師器破片点数 | 621点 | 94% |
| 瓦器破片点数 | 25点 | 3.8% |
| その他（青磁・石） | 2点 | 0.3% |

以上のように出土遺物数では土師器が圧倒しており、須恵器が少ないのは大きな特徴。

遺物の器種

須恵器

| | | | |
|---|---|---|---|
| 杯2点 | 甕4点 | 壺4点 | 不明1点 |

土師器

| | | | |
|---|---|---|---|
| 甕285点 | 製塩土器118点 | 高杯12点 | 椀・鉢3点 |
| 杯1点 | 皿1点 | 鍋釜1点 | 不明200点 |

土師器では甕の数が他を圧倒しているが、注目されるのは製塩土器らしき土師器の数量の多さである。また残念ながら破片が小さいために器種が特定できない土師器が200点にも及んだ。

SD1の遺物

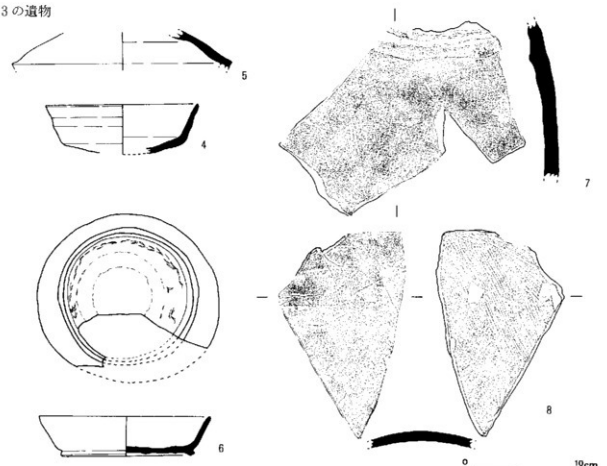
1　須恵器　坏　口径14.0cm　高台径10.2cm　高さ3.8cm
全体的に歪があり実用品であったかは疑問。外底面には爪形痕ともいわれる痕跡が高台内を巡っているが、これは縄状物体の圧迫痕と考えている。飛鳥Ⅳ期頃の所産と考えられる。

SD2の遺物

2　土師器　甕　口径17.3cm　径高指数27.1
体部の中段以下を欠損しているため全体の形状は不明。22の甕よりは体部の張りが小さく、短い形状か。器壁は厚手。体部外面中段には二次焼成の痕跡がある。外面には縦方向のハケメが観察できるが摩耗が激しい。

3　須恵器　壺　底部
底部径の小ささからすると、壺の底部か。外底面は調整が不良。体部外面は自然釉が見られる。

SD３の遺物




4　須恵器　坏　口径13.3cm　高さ4.4cm　径高指数33
器種は一応坏（坏A）とした。他に高杯も考えられるであろう。外底面に胎土の乱れがあり、或いは脚があったのかもしれない。しかし外体部には中下段に黒色変色帯が巡っており、或いは重ね焼の痕跡かと考えられる。そうすると高杯とは考えにくい。

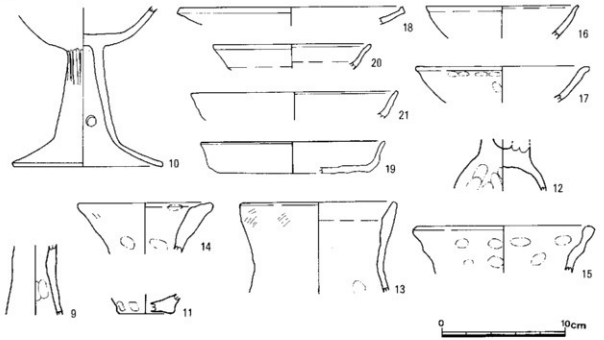
5　須恵器　壺　最大径19.4cm程度
外面は光沢がある程丁寧に磨かれている。内面は強いヨコナデが見られる。全体は須恵器の灰色というよりは、黒茶色といった色調である。肩部から上部へかけての傾斜角は割合大きいため一応壺状の土器と想定しているが、平瓶である可能性もある。

6　須恵器　坏　口径15.0cm　高台径12.0cm　高さ3.5cm　径高指数23.3
全体の変形が著しく、とうてい実用品であったとは思えない。胎土は須恵器の中では粗く、白色の石粒が多く見られる。外底面にはSD１で唯一出土した須恵器坏１と同様の痕跡が観察できる。この痕跡はヘラ状工具の跡とも人の爪跡ともいわれるが、休部および高台成型の際の輪状の敷台であろう。その証左として、内底面には、外底面の輪状痕跡をそっくり外すように大きな凹みがある。これは内底面をナデ調整した際の圧迫による陥没であろう。

7　須恵器　甕　下体部
かなり大型の甕の下体部。外面にタタキがないことがかえって珍しい。当然内面にも当て工具跡がなく、無造作なハケナデが見られる。

8　須恵器　甕　肩部
肩部が大きく偏平なところから、体部が横に張った大型の甕であろう。外面には縦方向の浅いタタキが見られ、内面は一面ナデ消されている。

土師器




9　土師器　高杯　脚
高杯の破片としては、高杯10に次ぐ大きさであるが、10とは大きく様相が異なる。この９は胎土が緻密であることから、焼成も硬質である。また内面の調整はまったく見られないことも特徴である。

10　土師器　高杯　脚底部径11.4cm　脚部高10.0cm　想定高13.5cm程度
SD３内にほぼ完形のまま遺存した。坏内底面が平坦であること。脚底部が僅かに外反すること。穿孔が１ヶであること。胎土が非常に粗いこと。脚部がヘラ磨きされていることなどが特徴であるが、その年代は今回の出土遺物の中でも最も古く、飛鳥時代を遡り、古墳時代のものではないかと

さえ考えられる。この10の出土によってSD３自体の開削年代に大きな問題が生じてしまう。

11　土師器　鉢？　底部径4.4cm
一見甕の底部のようだが、そうすると貼付けの尖底をもつ弥生Ⅴ様式以前になってしまい、時代が合わないようである。全体に不自然な摩耗が見られ、製塩土器や蛸壺の可能性がある。また底部は黒色で二次焼成の疑いがある。

12　土師器　蛸壺　推定最大径約８cm
体部上面に紐を通す鉛の破断面がある。内外の色調の差が大きく、全体の摩耗が激しい。

13　土師器　製塩土器　口径12.3cm
胎土は密で、14の製塩土器に近い形状をもつ。外面には僅かにタタキの痕跡があるようだ。口縁を水平にして復元したため、やや大き目になったが、14との関連性は大きいかもしれない。また或いは蛸壺の可能性もある。

14　土師器　製塩土器　口縁　口径10.5cm
口縁は小さく、縦長の体部がつく砲弾形の製塩土器ではないか。口縁内面に浅い沈線が一条巡っている。摩耗が大きいが外面に僅かにタタキの痕跡がある。今回の調査では土師器の製塩土器の破片の出土が目立っている。その形態はおよそ２種類に分かれるようであるが、ひとつはこの14のような砲弾形で、もうひとつは13のような大きなメガホン形のものである。

15　土師器　製塩土器　口縁　想定口径13.5cm
胎土は粗く、器壁が薄く、口縁手前で大きく屈曲していることが特徴である。二次焼成は確認できない。
キメが見られ、内面には当て工具の痕跡を見つけることは難しい。

16　土師器　椀　口径12.2cm　想定高約4.0cm
器種としては高杯、椀、鉢などが考えられる。同種のものは17だが、比べて器壁が薄い。

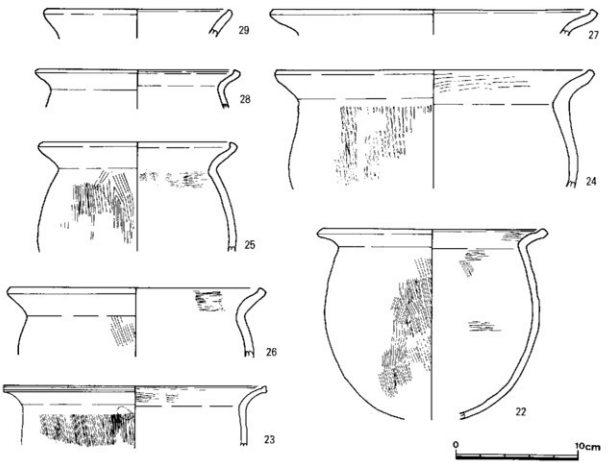
17　土師器　椀　口径13.3cm　想定高4.0cm程度
16と類似するが、こちらは口縁外部が大きくくびれており、高杯とは考えにくい。器壁は厚めである。

18　土師器　壷　口縁
残存悪く、口径は17～18cm程度か。一見これを全く逆様にして蓋にも思えるが、水平に置いた場合口縁端にかけて傾きが大きい。

19　土師器　皿　口径15.0cm
平底の皿。内外面剥離が認められる。口縁の立上がりは垂直に近く、ヘラ状工具による回転系の調整によって端部が僅かに外側に膨らんで一条の浅い沈線が巡っている。

20　土師器　皿　復元口径13cm　復元高2.5cm
今回の調査地点では土師器の皿の出土は少ない。外面に焼成ムラがある。

21　土師器　皿　復元口径17.6cm
外形は20とほぼ同一。土師器の皿・杯は年代決定に重要なウェイトを占める。




22　土師器　甕　口径17.7cm　高さ約15.8cm

今回の調査で検出された甕の中では最も遺存状況の良好な個体である。調査区や遺構の年代を類推する標本になるだろう。体部外面には縦方向の約1cm幅に7～8本単位の細やかなハケメが見られる。体部中段には焼成不良を示す黒斑がある。

23　土師器　甕　口径21.0cm

非常に硬質で、外面口縁部以下に緻密な縦ハケが見られる。ハケメ1本の間隔は1.3㎜で、1単位は9㎜幅に7本とはっきり確認できる。口縁は外反させて摘み上げ、おそらくヘラ状工具の先端で回転させながら調整したものと考えられる。内面は剥離が進んでいるが、口縁部には横ハケがあり、体部以下には縦ハケが見られる。

24　土師器　甕　口径25.0cm

今回の調査で検出された甕の中で最大のものである。胎土は密だが、黒色の石粒が多い。全体に摩耗しているが、体部外面には2～2.5cm幅で6～7本を単位とする縦方向のハケメが観察でき、さらに口縁内面にも単位不明のハケメが観察される。口縁外面には二次焼成が見られる。実用的な甕だったのであろう。

25　土師器　甕　口径15.2cm

今回の調査で出土した口径が最も小さい甕である。器壁は厚手で、口縁の立ち上がりが大きく、体部の横への張りが特徴。体部外面にはやはり縦方向のハケメが見られる。内面は横方向のナデである。また内面は有機物が沈着したかのように黒く変色している。釜の一種とも考えられる。

26　土師器　甕　口径20.0cm

色が白く、厚手の器壁で硬質である。体部外面には縦方向のハケメがあり、口縁外面には二次焼成の痕跡が確認される。おそらく高さが低く、横長の体部をもった甕であろう。

27　土師器　甕　口縁　復元口径25.7cm

今回の調査ではこのサイズの大型の甕が多く出土する。

28　土師器　甕

口径を復元できる程残存していないが、今回の調査で出土した甕のほぼ総てが口径約18cm以上なので同様であろう。

29　土師器　甕

口径は18cmを超える程度であろう。

# 第4章　ま　と　め

①検出された遺構は溝が３本（SD１とSD２・３）のみで、東側の溝は調査区内で分岐しているものと考えられる（SD２とSD３）。これらの溝の開削年代については、その埋土に含まれる多くの土師器と須恵器の比較検討から、東側の溝が飛鳥Ⅴ期（７世紀第４四半期末）頃と考えるのが妥当か。また西側の溝SD１は出土遺物が僅少であったため判然としないが、やはり飛鳥時代末か奈良時代初期のものと考えられる。

SD２・３については奈良時代に通有の須恵器など、飛鳥時代よりも明確に後代を示す遺物が検出されなかったことによる。

従って当地点における遺跡の年代はおおよそ西暦680年以降西暦710年に至るまでの間のものであるといえる。これが天武・持統朝の時期か文武朝、元明・元正朝のどの時期に当たるかはさらなる検討が必要であろう。

②検出された溝がどのような目的をもって掘削されたのかは不明である。

③溝SD３から検出された土師器の中には、明確な高杯の破片が２つある。このうち10は飛鳥時代を示す他の出土遺物からはさらにやや古相の古墳時代を示すともとれるが、詳細は今後ゆっくり検討してゆきたい。熊取町内では古墳時代盛期の遺物は現在まで一切検出されていないので慎重にならなければならない。確かに胎土は他の土師器甕とは異質に見えるが、飛鳥期にも外面に縦方向のヘラケズリのない脚を有する高杯は存在している。この10のみが他の全ての遺物の年代から100～150年かけ離れているのは不自然に思える。ちなみにこの10はSD３の最も下層から検出されている。

④SD３からは製塩土器と考えられる粗製の土師器の断片が多く検出されている。これらが明確に製塩に使用されたかどうかは不明であるが、他地域の製塩土器との外見上の比較によって一応製塩土器としておく。蛸壺の可能性もある。

これまで熊取町では平成11年度の七山東遺跡99-１区の調査で奈良時代のものと考えられる同種の粗製の土師器の破片が多く検出されている。また昭和62年には熊取町野田の東円寺跡87-１区の調査においても奈良時代の製塩土器と考えられる土師器破片が多く出土しており、今後さらによく比較検討していきたい。

⑤今回の調査で中世の包含層も検出しているが、図示可能な遺物は検出できなかった。

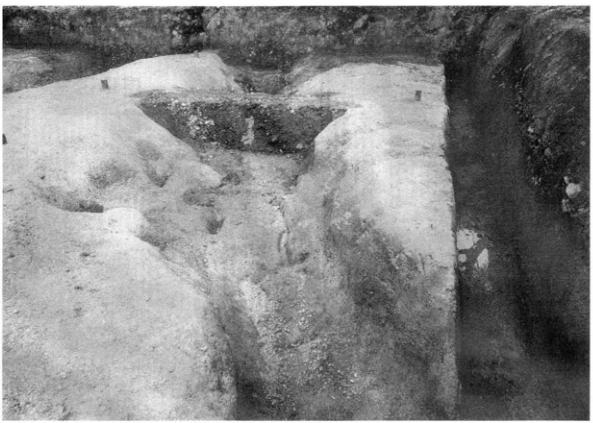
⑥①に関して、７世紀第４四半期以後の飛鳥時代に今回の調査地点の久保城跡98-１区が開発されたと考えられる。この時期に関してすぐに想起されるのは、645年の大化の改新後の公地公民の制、班田収授の法である。奈良飛鳥や難波に都があった頃、朝廷による公地支配体制のもとで、熊取町域も開かれていったのではないだろうか。

1　調査区全景

2　調査区全景

3　基本層序（北壁）

4　基本層序（北壁）

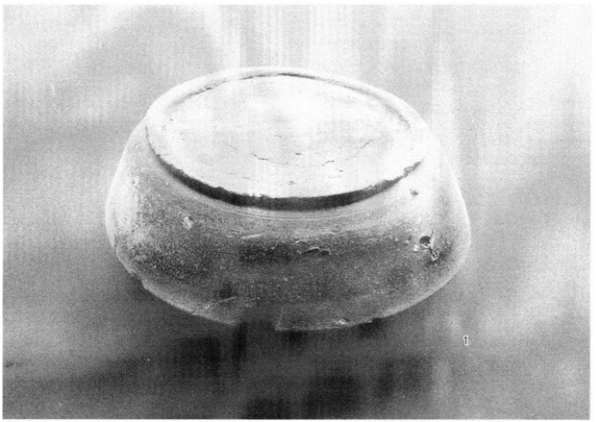


5　溝 SD1

6　溝 SD1

7　溝 SD2

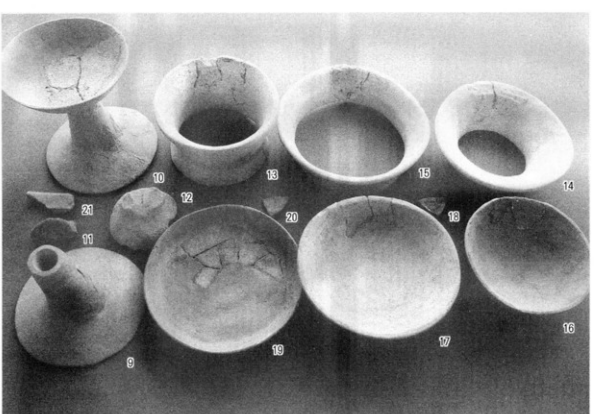
8　溝 SD3（手前）



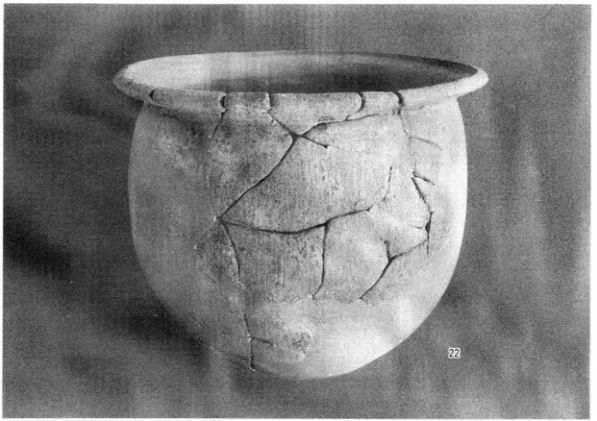

9　溝　ＳＤ１出土遺物

10　溝　ＳＤ２出土遺物

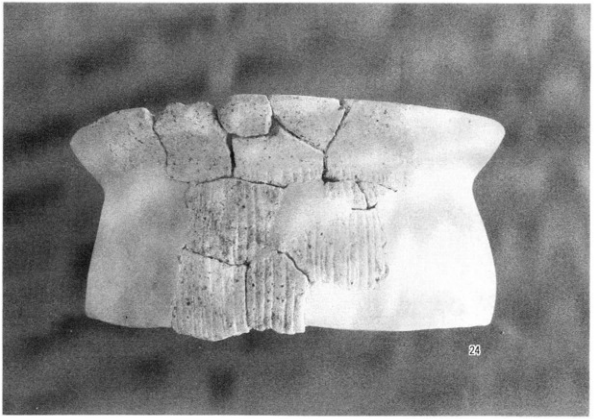
11　溝　SD3出土　須恵器



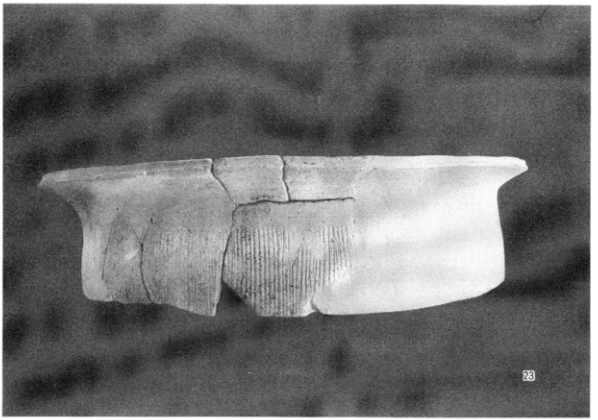

12　溝　SD3出土　土師器



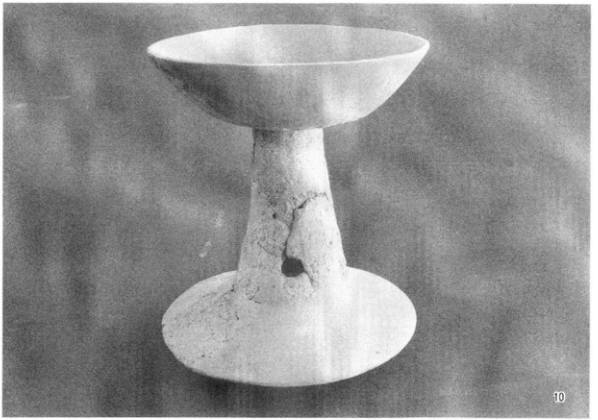

13　溝　SD3出土　土師器




14　溝　SD3出土　土師器




15　溝　SD3出土　土師器




16　溝　SD3出土　土師器

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | くぼじょうあとはっくつちょうさがいようほうこくしょ |
| 書名 | 久保城跡発掘調査概要報告書 |
| 巻次 | I |
| シリーズ名 | 熊取町埋蔵文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | 第34集 |
| 編著者名 | 前川 淳 |
| 編集機関 | 熊取町教育委員会 |
| 所在地 | 〒590 0495 大阪府泉南郡熊取町野田一丁目1番1号 |
| 発行年月日 | 西暦2000年3月 |

| ふりがな<br>所収遺跡 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>° ′ ″ | 東経<br>° ′ ″ | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 久保城跡<br>98－1区 | 大阪府泉南郡<br>熊取町大字<br>久保1568－3 | 27361 | 15 | 34″<br>23′<br>34″ | 135″<br>22′<br>15″ | 19980805<br>～<br>19990820 | 77 | 学童保育所建設 |

| 所収遺跡 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 久保城跡<br>98－1区 | 城跡 | ―― | 溝3本 | 古代土師器・須恵器・瓦器 | 飛鳥期 |

熊取町埋蔵文化財調査報告　第34集

久保城跡発掘調査概要報告書・Ⅰ

発　　行　平成12年3月
発行・編集　熊取町委員会
　　大阪府泉南郡熊取町野田一丁目1番1号
印　　刷　向山村印刷所
　　大阪府貝塚市近木1483